

令和7年度 第2回 富山県幼児教育推進連絡協議会 会議録

- 1 開催日時 令和8年1月28日(水) 10:30~12:00
- 2 開催場所 富山県庁本館4階大ホール
- 3 出席者(16名) 50音順
石倉 卓子委員、石田 和義委員、石動 瑞代委員、江本 美紀子委員、
小島 伸也委員、新村 彰 委員、芹澤 譲治委員、徳橋 曜 委員、
沼田 秀和委員、畠山 遵 委員 宮口 克志委員、宮田 徹 委員、
無藤 隆 特別委員、森 弘吉 委員、森川 朋子委員、養藤 直哉委員
- 4 会議内容
 - (1) 開会
 - (2) 議事 訪問研修の在り方について
幼保小接続のさらなる推進について
 - (3) 閉会
- 5 議事

(次長挨拶)

特別委員 (挨拶)
進行 小林委員は欠席
事務局 (令和7年度 富山県幼児教育センターの取組について報告)
 - 1 子供の発達や学びの連続性を確保したカリキュラムの実施のための研修の充実
 - 2 幼児教育接続研修
 - 3 幼児教育推進体制づくり事務局 (令和8年度 富山県幼児教育センター取組案について説明)
各部会報告 (紙面報告)
事務局 (訪問研修の在り方について話題提起)

訪問研修実施施設が増加傾向であるのに対し、今後訪問者の確保は難しくなっていくことが予想される。また、保育者の資質向上のために、事後研修のさらなる充実が必要である。その上で、訪問研修を持続可能にするにはどのようにしたらよいか。
(幼保小接続に向けたさらなる推進について)

幼保小接続は着実に推進されてきているが、さらなる推進に向けて、保育者や教員、市町村、家庭に対してどのように取組を進めていくか。
特別委員 県の立場として、すべての園に訪問研修に出向くというのは人数的に不可能だが、どの市町村にも1回は出向くことが必要である。市町村と県の連携を密にして市町村の需要を把握する必要がある。市町村ごとにアドバイザー等を養成し、その人たちが訪問することで、訪問研修の成果を県として吸い上げる仕組みをつくれればよいのではないか。アドバイザー等は、必ずしも県の方針を伝える役ではない。それを背景にしながらも、各園・所の理念、実際の環境に即しながら少しでもよい保育をすることへの示唆、特に、その園・所の先生が自分たちで考えられるような方法、そのための手だてを提供する役割となる。
並行し、全県に対するリモート等による研修で補完する。テーマを絞り、単に伝達ではない、今、現場で問題となっていることを取り上げながら行う。リモートの場合、全小学校、全園・所から参加することにする。もう1点は、リモート等の動画の資料等は、学校・園・所内

の勉強会を通して、全職員が情報を得て、考える場としていくことが必要である。2年、3年かけてその方向に進めることがよいのではないか。

二つの施策を組み合わせることで、幼児教育と小学校低学年教育の質の向上を期待したい。

委員

人材育成部会では、訪問研修において、保育者が何気なく無意識に行っている保育の意味を言語化してもらえることがとてもよいという意見があった。小学校教員や保護者に「目の前にある保育をどのように説明していくか」に意義がある。幼保小接続推進リーダー等の減少の背景として、チームで関わって支援することに意義があると考え、複数人で訪問しているので対応できないということなのではないか。今後もチームで訪問することを前提としながら、ニーズに応じてほしい。質問として、幼児教育接続推進リーダーの育成を中止し、新規幼児教育接続推進リーダーの育成研修を始めるということは、育成の内容を変えるということか。幼児教育接続推進リーダーが増えないことへの対応として、OB、OGを活用という案も出てきているが、自分自身の経験として現場を離れると現場の感覚が分かるか不安がある。OB、OGを活用しようと思った背景等も聞かせてほしい。意見として、重点とする市町村を決めて訪問するより、毎年、いろいろな市町村を訪問する方がよいのではないか。

事務局

幼児教育接続推進リーダーの育成はしないため、サポーターという位置付けで、今まで幼児教育接続推進リーダーとしてご活躍いただいた先生方の力を借りたい。園・所や団体等から、幼児教育接続推進リーダーとして推薦していただいているが、現場の人手は厳しい状況と聞いている。今、推薦いただいている幼児教育接続推進リーダーをもって、その育成を中止したい。文科省では各市町村でコーディネーターを育成すると言っており、今年度と来年度の2年間だけ、希望された市町村から推薦のあった方を接続のリーダーとして、研修を行っている。

委員長

幼児教育接続推進リーダーは、園・所から、ミドルリーダーの立場の方が出て、体系的な研修を受けている。訪問研修のチームの一員として、参観したり、公開したりする体験もすることで、訪問研修の質そのものがよくなると同時に、ミドルリーダーとしてそれぞれ園・所を引っ張っていくことが期待されている。これを県として広げていくためにサポートの必要性があり、研修が実施されていると思う。そのため、訪問研修の意味や目的をどのようにつなげていったらよいかも考えるとよい。

委員

現在、訪問研修を実施した園・所には学びがあるが、訪問研修をしてないところには、学びがない。保育計画案や事後の研修で話し合われたこと等をデータベース化して、見るができるようになれば、訪問研修を受けなくても、ある程度の学びがある。今まで0だった学びを少し増やしていくことができるので、訪問研修の要望を減らすことができるのではないか。

委員

市町村単位等で実施数を限定する。富山市であれば、任意で希望するところを募集する方法はどうか。毎年どこかの市町村が実施して、次はうちが実施したいと思えるような、訪問研修の在り方もよいので

はないか。

委員長 市町村に枠数を決めて、希望を募るとその地区の方も参加できる。小学校の先生も参加すると、幼保小接続にも繋がる。

委員 職員自身の時間が取れない。幼児教育接続推進リーダーの推薦も難しい。幼児教育接続推進リーダーが少なくなってきており、その一方で、資質向上も大切である。市町村内で公開保育があったら、そこに何人か職員を派遣し、参観を通して自分自身を見つめ直すようなことに繋がる。職員の資質向上の一環にもなると思う。また、データベース化されたものを活用することで、資質を高めていくことにも繋がるのであれば、よいと思う。広い範囲で参加しやすい公開保育の環境をつくっていただければ喜ばしい。

委員 毎年、保育を目指す学生が、減ってきている。7月の第1回協議会を受け、担当している学生たちと付属幼稚園の見学に行った。半数は小学校の教員を目指している学生だが、大学1年生から、幼保小接続への意識を高めていけたらよい。

委員 今年、訪問研修を受け、保育士たちが本当に悩んでいるところにアドバイスいただき、本当に嬉しかった。データベース化も嬉しい。一方で公開保育となると、悩むことになる。現場の保育を助けていただきたい。「頑張っているね」とアドバイザーに言ってもらったことが、今の力にもなっている。そういう訪問研修であってほしい。

委員 昨年、今年と幼保小中の保育者、教員が、参観後の研修会で意見交換をする場をもっている。その中で、互いにとても刺激がある。特に、幼児期は、子供たちが遊びを通して、社会で生きていく力を培う大切な時期だ。保育の実情を知ることによって、小学校教員も一緒に学ぶことができ、幼保小接続の必要感が醸成される。幼保小の交流、連携が非常に重要であることを機会があるごとに校長に話をしている。こども家庭部長にも声をかけて、私立の幼稚園、保育所の先生方も、ぜひ近隣の小学校へ足を運んでくださいと伝えた。日常的に研修、参観、交流することは大事であり、実情や実践に対して助言を行うことが効果的だが、必要感があるから助言に意味がある。今、悩んでいることにこそ、声をかけることが非常に重要である。市では、私も含め、指導主事等が授業研修の助言をしている。人数が足りないので、小中学校教員が教科等指導員として、一緒に行き、共に学んでいる。幼保の先生方がアドバイザー等と保育を見て、アドバイスをすることによって、資質向上にも繋がるのではないか。指導するというより、共に学ぶという姿勢で参加することが大切である。

特別委員 一つ目は訪問研修等の研修の充実について。架け橋期の在り方について、方向ははっきりしている。①すべての公立小学校と幼稚園、保育園、こども園、それぞれに架け橋接続研修の担当者を置く。そして責任をもって関わる。②公立小学校での架け橋期に関わる研修は悉皆にする。公立小学校は原則としてその地区にいる子供が全員通学する。架け橋期に関わる研修は義務的な研修でなければいけない。③小学校において、すべての教員がその架け橋期に関わる研修に参加する。架け橋期は単に小学校が幼保と繋がるだけでなく、低学年教育の改革を伴うべきである。中教審で、学習指導要領、要領指針の改訂の議論をしているが、その一つの柱が架け橋になる。ぜひ進めるべきである。

二つ目は、訪問研修の問題について。2024年、2025年度で、全国的に注目すべき動きがある。①公開保育を小規模にして、少ない参加者で保育を考える。園・所の保育がよい、悪いではなく、公開保育された園・所の保育について、どのようによくしていくかを一緒に考えていく。そのために園・所の保育のよさに注目する。協働の保育検討の場にする。園・所の保育をモデルとして提供するという意識は捨てる。②園・所の様々なリーダーとして任命され、研修を受けた人たちを、研修のリーダーに位置付けていく。さらにいくつかの園・所が集まっている研修においても、リーダーとして位置付ける。リーダーに位置付けられた人は、例えば、キャリアアップ研修のある部分についての指導者と認定できる。それによって、リーダーであることが園・所にとってプラスになる。③誰でも訪問し、一緒に議論するというやり方には二つある。一つ目は、30分等の極めて短い時間で話し合う。二つ目は、最近、園・所で土曜日も開いているところがある。そういう時間を利用し、2時間等の長時間で話し合う。それを動画に撮り公開するというやり方が、いくつかの園・所で始まっている。

三つ目は、幼稚園、保育所等の運営の要領指針の改訂の議論が始まっている。その中で、いくつかのポイントが明らかになっている。①0、1、2から3、4、5の繋がり、0歳から1歳、3歳未満から3歳以降の繋がり、そして幼児から小学校に繋がりをどうしているかということが非常に大きな焦点になる。②養成課程とも絡むが、幼稚園教諭、保育士養成を一緒にし、そこに小学校の養成も入る仕組みに転換している。当然、幼稚園、保育所、こども園の内容、保育内容ややり方が近接していく見通しがある。その中で、特に資質能力の考えや保育内容等は、現状のものを基本的に発展させる方向だが、一つ目は、学びに向かう力について、好奇心から好きになり、得意なことが生まれるという流れを想定するということが打ち出されてきた。二つ目は、体験と言葉を重視する。体験をより深めるためにも、身体感覚を重視し、そこでの子供の関わり、動き、実感というものが必要である。次に言葉を重視する。幼児においては、言葉は体験に根差したものである。子供たちが体験し活動したことを振り返り、整理するとき言葉は特に有用である。最後は、言葉というのが、いわゆる日本語としての言葉だけでなく、図で表す、身振りで表す、といった多様な表現手段の中の言葉だということである。

委員 昨年度から「架け橋プログラムの取組に向けた研修会」を実施し、幼保小が連携して取り組んでいる。今年度は、2回研修会を実施し、小学1年生や5歳児の様子から、小学校のスタートカリキュラムを幼保と共有し、具体的な改善に向け話し合うことができた。幼保小の「顔の見える関係」が構築され、各小学校で「公開保育」や「公開授業」を実施するなど、継続的な連携体制の確立に向け、成果が見えている。

委員 訪問研修においては、富山県幼児教育センターのアドバザーやリーダーに自園の保育を見てもらい、助言を受けることができる貴重な研修であると認識しており、引き続き機会づくりに努めていただきたい。

委員 1点目は、小学校の校長会として、幼保小の繋がりを意識した授業改善に取り組んでいる。例えば、よき学び手として小学校に入学してきている育ちを踏まえて、授業に取り組んでいる。実際、学校で泥ん

こ遊びやウサギの飼育をして、本当に子供たちが生き生きと授業に取り組む姿が見られ、私自身が驚いた。今後も幼保小接続を重視した低学年の授業を実践していかないといけない。2点目は、幼児と小学1、2年生が合同で授業をした。小学校の教員が授業者となり、保護者、保育者に見てもらった。子供同士にも関わりが生まれる。小学校の教員は、来年度入学してくる子供の育ちが分かる。ここで、どうしていけばよいのかと考えることは、きっと授業改善に繋がる。保育者にとっては、この後どうしていけばよいかを考える契機になる。保護者にとっては、入学までどう関わっていけばよいのかという見直しの契機になる。こういう機会が非常に大事であると改めて思った。

委員 今、富山中部高校のSSHという探究の推進協議会の委員をしている。幼保小までの接続では、探究活動も含めて取り組んでいる。しかし、中学校や高校に行くときは、受検対策になってしまう。幼保小の接続が中学校や高校に繋がるような仕組みがあるとよい。探究活動に近いことを接続の中で進めていってはどうか。

委員 幼児教育並びに小学校教育での取組と家庭教育には、非常に温度差がある。今、教育関係の方々は、幼児教育から小学校教育の接続に向けて取り組んでいるが、「家庭で育て、学校で鍛え、地域で磨く」が基本理念である。家庭教育が1丁目1番地であり、家庭教育でなされていないことを、学校教育でされても、子供たちはちんぷんかんぷんになりかねない。今、幼児教育、小学校教育の中で、子供たちの将来を考えて取り組まれている内容を、果たして保護者はどこまで理解できているのか。家庭教育でも協力できる体制の構築や保護者の学びの場も、今一度充実していただきたい。保護者向けの提案を啓発だけで終わらせないでほしい。親子が共に学ぶ場を県として設けていただけたら、より幼児教育並びに小学校教育が充実すると思う。

委員 幼稚園で先生が、飼っていたペットのことで、命の大切さについて子供たちに話していた。その先生が、「すごくよい話をしてるね」と褒められたことを、我が子は家でも自慢していた。嬉しかったらしい。先生に対しては、子供を預けて、任せて当たり前というイメージだったが、先生方も日々勉強して、いろいろ考えていると分かった。安心子育てリーフレットを読んでよいものだと思ったが、これ以上分かりやすい形があれば、親としてできることを家庭でも一生懸命に取り組みたい。

委員 今年、市でいろいろな取組がされている。小学校側と幼児教育側が現場で繋がっていないとなかなか理解できない。私には、小学校低学年の娘がいる。噂で聞いていることが現場で起こっていると感じている。授業が成立していない状況はどこでも見られると思う。これは幼児教育側から小学校に上がった段階で、環境がぱっと変わることが大きな原因だと思う。互いに理解し合いながら、子供たちが幼児教育の現場でどういうことをやってるか、小学校に理解してもらい、幼児教育が小学校にどんな協力ができるか、タッグを組んで取り組んでいく。どういう子供たちなのかは、それぞれの幼児教育の現場で違う。そこを理解していただきたい。校区での繋がりがとても大事になる。ぜひ現場を大事にしてほしい。現場を大事にして、これからも取り組んでほしい。

副委員長

幼小の意識をどう繋いでいくかということが一番大事だと思う。どちらが悪いとか足りないとかという話ではなく、どうやって一緒に取り組む場をつくっていくかの工夫が必要である。1年生は真っ白ではない。幼稚園、保育所、こども園でたくさんの色がついて、その先に小学校があるということを、小学校の先生たちにどれだけ理解してもらうか。幼稚園で何をして、何を大切にしているかをどう見せるか。実感をもって認識してもらえる場をつくっていけたらよい。その点で公開保育として、「こんなよい保育をやっている」ということをみんなで勉強していくのではなく、より日常的な保育を公開し、意見を言い、研修を気楽な場として設定していけば、公開保育をする重圧もなくなってくる。最後に教員養成の側からすれば、やはり、学生たちが「自分は小学校の先生になる」「自分は高校の先生になりたい」と思うほど、他の校種に目が行きにくくなる。特にこの幼児教育と小学校教育の接続で言えば、授業の中で組み込むことができたらいと思っっている。私が担当している授業も、学生たちから「自分は高校を志望しているから、幼稚園はあまり関係ないと思っていたけれど、実際はずっと繋がっていると改めて感じた」「自分は小学校志望だが、幼稚園との関わりの大事さは改めて考えなくてはいけないと思った」という感想が出る。その段階から学んでいく必要がある。

委員長
事務局

(お礼と挨拶)

(幼児教育センター所長 挨拶)

(終了)